K O T O B A N O U M I

ISSN 1345-0379

MIYAGI PREFECTURAL LIBRARY

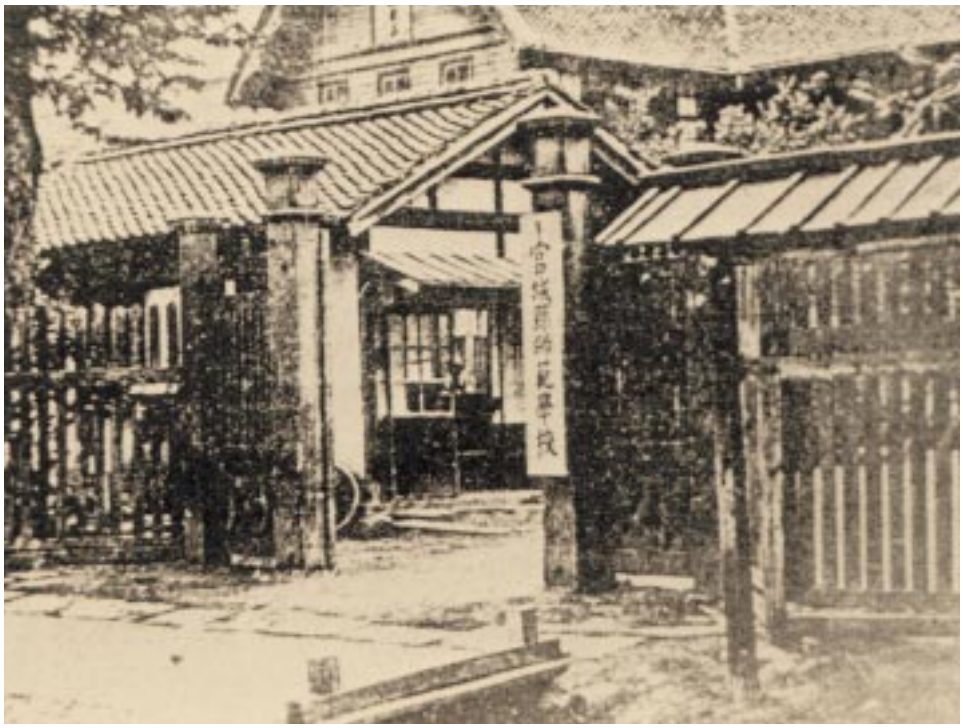
ことばのうみ

宮城県図書館だより

No. 9 2002-1

特集 「宮城県図書館の120年を振り返る」

「本日開館。公衆ノ来館ヲ許ス。此ノ旨公告ス。」



明治14年7月25日、宮城県師範学校内に宮城書籍館（みやぎしょじゃくかん）が開館しました。
右記の文は、新聞広告として1週間掲載されました。

図書館アートシリーズ……❺

あずまや
川俣　正　作

遠野考

姫神

岩手県、遠野市の早池峰神社の境内でコンサートを開いた折に、地元の古老から聞いた話しは今でも脳裏に焼き付いている。

ある日のこと、早池峰神社を修復していた大工の者たちが夕方になって帰らんとする頃、何処からともなく一人の女が現われて、私の社（やしろ）も修復願いたいと申し出たという。境内の隅を見ると、そこには古ぼけた小さなお稲荷さんの社があった。大工の者たちは驚きながら、いったいこの女は何者かと不思議に思ったそうだ。

この話しを聞いた地元の者たちは、それはお稲荷さんの化身であろうということになって、衆議一決、社を早速に修復したそうだ。

コンサートの前日、真新しいその社に手を合わせながら、今も自然の神々に対して畏敬の心を持って暮らしている遠野人に、私は強い衝撃を受けたのだった。柳田国男が遠野物語で、平地人を戦慄せしめよと云ったのは、まさにこの事ではないかと思った。

（ひめかみ　シンセサイザー音楽家）

特集「宮城県図書館の120年を振り返る」

平成13年7月25日、宮城県図書館は設立120周年を迎えました。名称や建物は度々変わりましたが、120年という長い期間、絶えることなく続いてきた公立の図書館は他に例を見ません。
今回の特集は、宮城県図書館の120年の歩みを振り返ります。

設立当時のこんなはなし

当時、宮城書籍館は師範学校の中にあり、講堂を閲覧室にあてていました。このため、師範学校の入学式や卒業式のときには休館になっていました。当時の開館時間は、宮城書籍館規則第3条によると「本館ハ毎日午前第8時ニ開キ午後第7時ニ閉ツ　但毎年7月11日ヨリ9月10日マテハ午前第7時ニ開キ午後第7時ニ閉ツ」となっています。

ドーム型の新館

大正元年、総工費59,164円99銭9厘（当時の大卒者初任給は45円です）で建設された新館は、レンガ造りの書庫以外は木造でした。しかし、中央にドーム型の屋根を持ち、非常に近代的な感じの建築様式であったため、のちに秋田県や岩手県にも影響を与えたと言われています。

大正元年に新築されたドーム型図書館

ドーム型図書館内　普通閲覧室

戦争と図書館

昭和20年4月、戦況が厳しくなる中、貴重書の疎開作業が始められました。当時、この作業には、徴兵された男子職員に代わって女子職員のみがあたっていました。また、疎開費用がままならず、当時の館長が図書館のドーム型屋根の中の鳩の糞を肥料代わりに疎開先へ送り、費用の一部弁済にあてたという言い伝えもあります。

しかし、こうした疎開作業がまだ十分に進まないうちの7月に仙台空襲に見舞われ、疎開できなかった資料約13万冊と建物を焼失しました。

一方、被災後の図書館は、空襲から5日後の7月15日には当時の館長宅(仙台市元鍛冶町)に臨時仮事務所を置き、早くも図書の収集や館外貸出を始めたという記録があります。

また、戦後まもなくから昭和30年代にかけては資料収集に奔走する日々が続き、館長自らがリュックを背負い、東京へ本を買いに行ったというエピソードも残っています。更に、書店だけでなく個人のお宅へ本を譲り受けにリヤカーを引いて行ったりしていました。職員が一丸となって図書館復興のために働いた時代と言えます。

昭和24年復興された県立図書館　養賢堂を模したもの

無料で利用できるようになったのは

図書館の利用が原則無料になり誰でも自由に閲覧や貸出ができるようになったのは、実は、戦後しばらくしてからのことです。明治42年には、図書の貸出を受ける人の条件として「官公立学校職員及び官公吏」または「直接国税3円以上を納めている成人」などという制約がありました。また、戦後間もない昭和24年には、図書館閲覧料条例が定められ、図書の閲覧料として1回2円を徴収していました。しかし、昭和25年の図書館法制定を受け、昭和26年までにこの条例は廃止されました。

戦前の日本の図書館は資料を大切にするあまり、職員が厳しく利用者を監視し、本には鎖がついているなどと言われていたほどです。こうした図書館の古いイメージを廃し、利用者が自分の読みたい本を直接書架から取り出せるようになったのは戦後のことなのです。

昭和10年頃の利用案内　表紙には「読書は萬能ノ基」（林　子平）とあります

明治	14年 7月（1881年）	宮城書籍館開館（25日） 館長：林通（宮城県学務課九等属が兼務） 場所：仙台市勾当台通り28番地（現：勾当台公園） 建物：宮城師範学校の講堂（116㎡）を閲覧室、書庫（66㎡2階建）を業務室と書庫に利用 蔵書：17,682冊(和漢書1,646部、洋書83部) 統計：開館日数156日、利用人数5,786人、利用冊数10,275冊、予算362円（明治14年）
	25年 5月（1892年）	大槻文彦(当時の尋常中学校長　国語辞典「言海」の著者)が　第8代館長を兼務（～28年12月）
	26年 1月（1893年）	宮城師範学校が別の場所に新築移転したため、元師範学校附属小学校校舎を修築し移転 建物：延面積304㎡の独立館 縦覧室（127㎡）事務室（68㎡） 書庫（40㎡）
	40年 4月（1907年）	宮城県立図書館に改称(国の図書館令改正による) 理由：名称に費用負担者名を表示することになったため
大正	元年10月（1912年）	独立館を新築して移転 場所：現在の勾当台公園南辺 建物：延面積1,740㎡　閲覧座席数242席 蔵書：68,000冊 統計：開館日数295日　利用人数81,842人　利用冊数196,574冊　予算11,132円（大正元年）
	8年11月（1919年）	宮城県図書館に改称
昭和	6年10月（1931年）	宮城県図書館創立50周年・青柳文庫創立100周年記念式典を挙行（13日）
	8年10月（1933年）	国の図書館令により宮城県図書館が宮城県中央図書館に指定
	16年12月（1941年）	太平洋戦争開戦
	20年 4月（1945年）	戦火を避けるため貴重図書類（12種、8,557冊）を疎開 疎開先は宮城町上愛子の石垣彦左衛門、宮城町芋沢の佐藤兵之進両家の土蔵
	7月	仙台空襲で建物および図書類を焼失（9日深夜～10日早朝）
	23年 5月（1948年）	館舎復興の起工式を挙行 場所：宮城県庁西側の旧養賢堂跡地（現：宮城県庁議会棟辺） 建物：建坪725㎡　延面積1,091㎡
	24年11月（1949年）	新館の落成式を挙行（3日）
	12月	伊達家より伊達文庫約35,000冊を購入（25日） 図書および図書に準ずる形態の資料は県図書館で所蔵し、これ以外は仙台市博物館へ
	25年 3月（1950年）	大槻文庫79種、214点を受贈 第8代館長で国語学者の大槻文彦博士の旧蔵書文彦博士と博士の父磐渓（江戸期の儒者）の著書が大部分
昭和	25年 4月（1950年）	図書館法公布（30日）
	33年12月（1958年）	児童会館（新坂通）に「分室こどもとしょかん」を開設し、児童書を移管する
	43年 1月（1968年）	新築移転（18日） 場所：仙台市榴ヶ岡5番地（現：宮城県公文書館） 建物：延面積4,040㎡ 蔵書：190,000冊あまり
	9月	配本車による県内の市町村図書館・公民館への資料貸出開始 74市町村中の69市町村に配本所を設置
	44年 7月（1969年）	移動図書館車「こかげ号」の運行開始23市町村に53駐車場を設置
	48年 4月（1973年）	貸出方式をブラウン式に切り替える
	53年 6月（1978年）	宮城県沖地震（12日） 地震による被害のため6日間休館
	56年10月（1981年）	創立100周年記念式典を挙行（31日）「宮城県図書館年表」「創立100周年記念特別展図録」を刊行
	58年 5月（1983年）	書庫の増築ならびに館内の全面的な改装が終了 青少年室と年齢による利用の制限（小学生以下は認めない）を廃止
	59年 3月（1984年）	「宮城県図書館百年史」を刊行
	61年 4月（1986年）	日曜開館を始める
平成	元年 8月（1989年）	松島瑞巌寺所蔵の仙台版木1,700枚を図書館に移管
	2年 6月（1990年）	図書館所蔵の「坤輿万国全図」が、国の重要文化財に指定される
	3年 6月（1991年）	協力車の運行開始
	7年11月（1995年）	宮城県図書館新館建設起工式挙行
	12月	井上藤吉氏より「街頭紙芝居」3万点を受贈
	8年10月（1996年）	宮城県図書館情報ネットワークシステム稼動
	9年 8月（1997年）	宮城県図書館(榴ヶ岡)閉館記念行事、閉館(31日)
	9月	宮城県図書館竣工
	10月	新館への移転開始
	10年 3月（1998年）	新館オープン(21日) 場所：仙台市泉区紫山1丁目1番地1 建物：延面積18,100㎡ 蔵書：645,000冊(3月31日現在)
	11年 2月（1999年）	ふたば文庫9,500冊受贈
	12年 4月（2000年）	祝日開館実施 図書館ホームページ公開（20日）
	13年 4月（2001年）	館内の蔵書検索用端末を更新　インターネットによる蔵書検索を公開

明治期のベストセラーは、「福沢本」といわれる福沢諭吉の一連の著作で、「学問のすゝめ」など。

明治期の終わりから大正のころのベストセラー作家といえば夏目漱石。次々と著作を発表しています。

戦後、復興された図書館が完成した昭和24年は永井隆の「この子を残して」（講談社）「長崎の鐘」（日比谷出版）などの記録物が喜ばれました。

昭和43年のベストセラーには「どくとるマンボウ青春期」（中央公論社）などがあります。また、「少年ジャンプ」（集英社）や「少女コミック」（小学館）が創刊されています。

昭和56年には記録的ミリオンセラーとして「窓ぎわのトットちゃん」（講談社）があります。

本を届ける

宮城県図書館は、設立から現在まで分館は設けず1館で運営してきました。しかし、県の図書館である以上、県全域へのサービスの実現が課題でした。そこで、昭和43年、配本車による資料貸出をスタートしました。これは、県図書館の本を50冊ずつ行李（こうり）に詰め、市町村図書館や公民館に箱単位でお届けして、地域の住民の方々に利用していただくものです。さらに、市町村図書館や公民館から遠く、図書館サービスが利用できない地域へは、移動図書館車「こかげ号」を昭和44年から運行し、山間の小さな分校などを中心に巡回しました。この移動図書館車には巡回先の市町村公民館などの職員の方々にも乗務してもらい協力して貸出し等を行っていました。「カッコウワルツ」の音楽とともにやってきたこかげ号のことをご記憶の方も多いのではないでしょうか。

動く図書館「こかげ号」

昭和43年榴ヶ岡に新築・移転されました

行李に本を詰めて配本車で運んでいました

まちの図書館を支える

配本車や移動図書館の運行は、県図書館が直接本を届けるものでしたが、2～3か月に1度の巡回で、しかも冬期には運行できないなどサービスとしては限界がありました。そこで、平成3年から、市町村図書館に対し、その図書館が必要とする資料を届けるための協力車の運行が始まりました。県図書館は、住民の方々の最も身近にある図書館＝市町村図書館を支えるため、図書館の図書館として活動すること（住民の方々の要求に応えるため、市町村図書館に資料を貸出す）が業務の大きな柱として位置付けられています。これにより、県内どこに住んでいても、身近な図書館から県図書館の資料が利用できるようになりました。現在もこの協力車は利用が増え活発に運行していますが、市町村図書館の設置がなかなか進まず、県全域へのサービスとしてはまだまだこれからです。地域の特性にあった図書館活動をするためには、すべての市町村に図書館があることが理想です。現在の県図書館は、まだ図書館のない町村への働きかけや、図書館づくりの支援もしています。

坤輿万国全図（こんよばんこくぜんず）

平成2年に国の重要文化財に指定された坤輿万国全図は、長さ約170㎝、幅約60㎝の巻物6軸からなる非常に大きな世界地図です。完全な刊本としてのわが国での所蔵は、私蔵のものは別にして、京都大学図書館と宮城県図書館で確認されています。京都大学図書館所蔵のものは、全図の中に印刷されているイエズス会のマーク(3個)がすべて削り取られていますが、本館所蔵のものは残されています。

この世界地図の由来は実のところよくわかっていません。おそらく、すぐれた洋学者の多かった仙台藩の天文方にあったものが藩学養賢堂を通して入ったものと推定されています。

坤輿万国全図

参考資料：「本の百年史－ベストセラーの今昔－」瀬沼茂樹著 出版ニュース社 1965.9　「新版　出版データブック」出版ニュース社編 出版ニュース社 1992.12
「宮城県図書館百年史」宮城県図書館編 宮城県図書館 1984.3

時と空をこえて

◎貴重書の世界

［朝鮮本(韓本)　三綱行実図（さんこうこうじつず）］

朝鮮・李朝の第四代国王である世宗（せいそう）（1397－1450）の要請により編纂された教訓書。儒学で社会の根本とされる三つの大綱、「忠」＝君臣の秩序、「孝」＝父子の秩序、「貞」＝夫婦の秩序を解説したもの。それぞれの綱の模範となる行いを選び、図と漢文による解説、詩及び賛により説明している。図の上欄には漢文と同じ内容を諺文（おうもん）（ハングル）で記述している。ちなみに、儒学（朱子学）は李朝の国教、ハングルは1446年、世宗が「訓民成音」の名で公布したもの。日本では、江戸時代にこの教訓書を題材にした浮世草子が発行されるなど国内にもたらされた影響も大きい。初版は1432年に刊行されたものであるが、本館所蔵は1579年、第十四代国王宣祖のときに改訳刊行された「宣祖改訳三綱行実図」、木版本で、伊達家所蔵のものに由来。なお、宮城県図書館ではこれを含めて46点、262冊の朝鮮本（李朝時代の刊行本）を所蔵している。そのうち、朝鮮の誇る銅活字本は15点である。

〔三綱行実図〕
37.2cm×22.7cm

わたしのこの一冊

My Favorite Book

仮象の世界
―「内なるもの」の現象学序説 ―

霜山　徳爾　著　　思索社　　1990年（新装版）

目ざめ と 癒やし　　仙台市　高橋　澄

この書は、表題のもとに「人間とは何か」を精神病臨床医であり、大学教授でもある著者の臨床心理学、精神病理学、人間学からの客観的、実証的な考察である。

ところが、専門書の難しさを越えて、直かに温かく語りかけ、知性と芸術の豊穣な沃野と底知れぬ深淵への道に、同行を許される。

―いつか、人間の生涯には、夕づけて夏がかすかになりやみ寂滅（ほろび）の静かな歌が聞こえてくるようになる―と緩徐調（アダージョ）で始まり、「仮象の世界」が展開する。「直立、両手、横臥、病気」「初の微笑、遊戯」「哀歓、共感、共苦」など人間学の基本から身体と精神の直結、更に「汝、他者」との絆の存在の「内なるもの」の豊かさと翳りが、冷静な科学に立脚し、温かな視点により、克明に釈かれる。

著者は、少年期に美しく変幻する万華鏡を壊し、小さな鏡と色紙の断片に「内なるものの変調」を感知したという。学生時代には戦時下、暗く飢もじい明日知れぬ命に、東都の大学図書館での耽読の日々もまた「仮象の世界」「内なるもの」への探究の原体験となり「心の基調」になっていると述懐している。

誠に、本書を貫く主旋律は、人間の根源に目ざめ、互いの困難な通路と旅路に「ちえ」と「なさけ」の必要と癒やしを促すものである。

驚くほど多彩で的確な引例も、古今東西の先達の魂に触れる至福、実に稀な、魅力いっぱいの「私のこの一冊」である。

表紙エッセイ／姫 神さん

ひめかみ。本名、星　吉昭（ほし・よしあき）。シンセサイザー音楽家。宮城県若柳町出身。1980年に「姫神せんせいしょん」を結成し、翌年「奥の細道」でデビュー。1984年に「姫神」と改める。テレビ・ラジオ番組、CMのテーマ曲も数多く手がけ現在までにアルバムを20枚以上リリースしている。2000年には、日本人として初めて、エジプトGIZAピラミッド前と、エルサレム・ミュージアム広場での聖地コンサートを実施した。

図書館からのお知らせ

特別整理期間のための休館日

資料の特別整理のため、下記の期間は休館します。
ご不便をおかけしますが、ご理解とご協力をお願いします。

期間：平成14年2月19日（火）～平成14年3月5日（火）

街頭紙芝居展

仙台の紙芝居屋さん、井上藤吉さんの紹介や原画を展示しています。

期間：平成14年3月30日（土）まで　　9:30～17:00
（特別整理期間などの休館日を除く）
場所：2階　展示室

郷土関係資料をご寄贈ください

宮城県図書館では、県内で刊行された図書や雑誌または郷土や郷土人に関する資料を広く集めています。それを誰もが利用できるようにし、次の時代への文化遺産として保存していくことは図書館の最も重要な使命です。個人の方あるいは団体で新たに出版されました時には、是非ご寄贈くださいますようお願いします。詳しくは下記担当までお問い合わせください。

●郷土資料担当　TEL 022－377－8482　FAX 022－377－8494

ことばのうみ

題字　作家・高田　宏 氏
本誌タイトル『ことばのうみ』は、本館第8代館長・大槻文彦編著による日本最初の近代的国語辞典『言海（げんかい）』（1889～1891年刊行）に由来する。

第9号　2002年1月発行
編集・発行　**宮城県図書館**
〒981－3205　仙台市泉区紫山1丁目1番地1
ＴＥＬ022－377－8441（代表）ＦＡＸ022－377－8484
ホームページ　http://www.pref.miyagi.jp/library/